
玉座の間大扉の戦い

坂本伊能

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

玉座の間大扉の戦い

【Nコード】

N4091F

【作者名】

坂本伊能

【あらすじ】

王城へと攻め寄せた革命軍。革命軍は騎士達より質で劣るが、指揮官の奮戦もあって戦況を有利に進めていく。しかし玉座の間へと続く大扉の前に立ち塞がるは、將軍であった。

王城と呼ばれる城。その玄関が、開け放たれた。雪崩れ込んでくる兵士達。いずれも軽装で、正規兵ではなく武装した民間人だった。

対し、玄関から伸びる廊下の各所には、全身を甲冑で包んだ騎士が待ちかまえていた。

騎士に向かい、兵士の1人が剣を振り下ろす。

ベコオツ、と金属音。しかし甲冑は貫かれる事が無く、代わりに騎士が振るった剣は、兵士の首を飛ばした。

そついう光景が、玄関から伸びる廊下の各所で見られた。

「オラア、気張れエ！」

質によって押される兵士達を、男が鼓舞する。

両手にダガーを持った男だ。男は軽やかな身のこなしで騎士の死角に回り込み、ダガーで思い切り甲冑を突き刺した。

刀身の短いダガーは、それだけに強靱だ。折れる事無く、甲冑を貫き、騎士の喉笛を突き破る。

「この国が終わる瞬間なんだ！」

終わりを見ずに死ぬなんて無粋な事、するんじゃないエ！！」

男の活躍と、物量による差が、騎士達を押していった。

特にグイグイと押されているのが玉座の間へと繋がる正面廊下だ。

数十人の騎士に、数百人の兵士が襲いかかってくる。

押し倒され、甲冑を脱がされる者。甲冑の隙間から滅多刺しになる者。甲冑がとうとう突き破られた者。

そういつた者が多く出始めていて、防衛線は崩壊していた。

男が兵士の間を駆け抜け、いち早く正面廊下を抜ける。

玉座の間へと通じる、大扉がそこにあつた。

高さ5mはある巨大な扉。その向こうに皇帝はいる筈だ。そういう時間を、狙っていたのだ。

だが扉は厚い。扉の前にいる老将軍が、扉を数倍厚くしている様な感覚を与えていた。

「盗賊、ヴァン・ゴールド。

まさか貴様の様な男が、革命軍の陣頭指揮を執っているとは」

「傭兵だ、爺」

男、ヴァンに老将軍が呟く。

訂正しながらも、ヴァンはダガーを構えた。

後ろに兵士達が到達していたが、門の前に老将軍が立っていると知るや、途端に足を止めていた。

別の指揮官がその兵士達を別の廊下に回し、制圧していく。

大扉は、ヴァンに任された恰好になっていた。

浮ついていた足並みを、ヴァンは整え、老将軍に向き直る。

「武器負い」の爺将軍殿。

てつきりアンタは、オレ達の味方だと思つてたんだが」

武器負い。老将軍の異名であつた。

名に違わず、老将軍は異様な出で立ちをしていた。

背中に大きな斧を背負い、更に槍を2本交叉する様に掛けている。

腰には4本の剣、刀。合計で7振りの武器を持つその姿は、歩く武

器庫と言っても過言では無かった。

「儂としても、本当は貴様等に与したかったんだがのう。
しかしそうしては、折角皇帝が下ろされても何も変わるまい。
抵抗する人間がいて、斬る必要が生じて、そうして古いモノをド
ンドンと斬り捨てていかねばならぬ。」

革命とはそういうモノだ、ヴァン・ゴールド」

「老兵は死なずただ去るのみ、って言葉を知らねえのか？」

「知っておるとも。」

しかし去るより死ぬ方が良い、と軍人である儂が判断したまでだ」

「アンタの娘はどうなる？」

彼女は、アンタに死んで欲しくない筈だ」

「娘は娘だ。儂が居らずとも、好きに生きるじやろう。
じゃが国には儂の死が必要じゃ」

「食えない爺だ」

ヴァンはダガーの1振りを鞘に直し、別の短剣を取り出した。
十手型の短剣。それを握り、ヴァンは地を蹴る。

武器負いが剣を抜いた。振り下ろす。

速度も威力も並だが、避けられそうにない剣閃だった。まるでヴァ
ンがどこに来るか、わかつていいるかの様な剣閃。

ヴァンはそれを十手型の短剣で受け止めた。絡め取り、地面に向け、
切っ先を下に向けさせる。

バキィッ

その剣を、思い切り踏み抜いた。

刃は折れる。だが片手で振るっていた武器負いは、もう片方の手で、刀を抜き取った。

首を狙った一撃。これは避けられた。屈んで避けて、ヴァンは武器負いの腹に蹴りを入れる。

しかし、服の下に胴当てを着ていたらしく、蹴りはガンッ、という音の前に無力化された。

一旦ヴァンが下がる。

それを見るや、武器負いは剣を直して、槍を両手持ちで構えた。

「行くぞオ小童アッ!!」

回る様な槍さばきで、武器負いがヴァンに迫る。

旋風の様な薙ぎ払いの連続から、鋭い刺突。避けるので精一杯。

いや、受けようモノならばすぐさま弾き飛ばされるだろう。

目に見える程の強力さがその槍にはあった。

「ハアッ!」

ヴァンが隙を突いて、ダガーを投じた。

すぐさま先程鞘に入れたダガーを引き抜き、地を蹴る。

ダガーを投じられた武器負いは、反応して顔を動かす事でダガーを避けた。

槍では弾けなかったし、体さばきで躲す時間は無かったのだ。

その一瞬の隙が、ヴァンを懷まで入り込ませた。

槍の攻撃範囲の更に内。気付いた時には、ヴァンがダガーを突き出

していた。

ギンッ

ダガーを、どうにか武器負いは弾いた。槍の柄で弾いたのだ。間を置かずに十手型の短剣が繰り出される。それも槍の柄で受け止める。

迫り合い。だがすぐに、武器負いがヴァンの腹を蹴飛ばし、距離は開いた。

まともな防具を身につけていなかったヴァンは、腹への攻撃に呻き、地に崩れる。

「そこじゃあアッ!!」

武器負いが、背中 of 斧を抜いた。

振り下ろす要領で、それをヴァンへと投げつけた。

ヒュンヒュン、と斧が凄まじい勢いで迫る音が、ヴァンの耳にも聞こえた。

「ガアッ!」

渾身の力で、ヴァンは跳ぶ。

どうにか、避けられた。

だが武器負いが迫ってきていた。槍を振るい、叩き下ろす。

ギンッ

「ぐあああッ……!!」

ヴァンが呻いた。

どうにか、槍をダガーで防いだ。

だがそれでは槍の勢いを殺しきれず、足に食い込んだのだ。

すぐさま武器負いは槍を引き、更なる一撃を加えようとする。

そこへ、ヴァンはダガーを投げた。

ジギンッ！

「効くか！」

ダガーを、武器負いは槍で弾いた。

その隙をヴァンは見逃さなかった。

懐へ手を伸ばし、取り出すは小麦粉袋。

それを思い切り武器負いの足下へと投げつけたのだ。

小麦粉に、武器負いの視界が覆われる。だが些細な量。すぐに晴れるし、障害される範囲もそれ程ではない。

だが、ヴァンではそれでも十分だったのだ。

閃く切っ先。

煙幕の向こうから現れたそれに、咄嗟に武器負いは喉を防御した。

だが切っ先は喉元ではなく、足を狙っていたモノだった。

全く予期していなかった場所を突かれ、反応できず、武器負いは足を刺された。

崩れ落ちる。両者共にだ。

「小童、貴様ア……。」

最初から儂を殺すつもり等、無かったか」

「アンタの娘は、同志なんだよ。」

その父親のアンタには、恩赦をする必要があるんだ。

アンタ、軍人だからつって政治わかんねえフリすんなよ……？」

「傭兵風情が、政治を語るとは」

話す内、周囲を兵士達が取り囲み始めた。

武器負いは最後には恭順の意を示したので、ヴァンと一緒に担がれて連れ出される。

外で守っていた武器負いの娘が、父親の姿を見るなり駆け寄ってくる。

横目で見ながら、ヴァンは自分の方にやってくる人影に気付いたのだった。

（後書き）

やはりストーリーはありませんが、黒衣の男と繋がりがある様にも
思えますね？

終わりにつきましては、好き勝手やる野郎2人にも結局待つ人はい
ましたよ、という落ちです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4091f/>

玉座の間大扉の戦い

2010年10月12日05時24分発行